

持続可能な未来に向けた人口300人の島づくり

～Iターン者と椿農家の繋がりが利島の未来を創る～

東京都利島村 荻野 了



1. はじめに

全国各地で少子高齢化と人口減少が進んでいる中、利島村では、近年、人口の大きな増減はなく、約300人という定常人口を保っている。長い歴史の中で、この300人という数は、島の自然が無理なく養うことのできる島民の数なのかもしれない。

島は面積も小さく、資源が限られていることもあり、高校進学で島外へ出た後は、長男以外の男性が島へ戻ることは少ない。現在、島出身者は減りつつあるが、島外からのIターン者の増加により人口が維持されている。だが一方で、基幹産業である椿産業の高齢化が進み、後継者不足に悩まされている。今後、後継者不足のまま、椿農家の高齢化が進んでいけば、農家数が減少し、管理ができなくなる椿山が増えると考えられる。それは、椿山の荒廃を意味し、椿産業の存続にも繋がる課題として、強い危機感を抱いている。

私は、これからの利島を考えたとき、元々の人口が少ないため、Uターン者は人数が限られていることもあり、Iターン者が、人口を維持するために、重要な存在だと考えている。またIターン者と椿農家を含めた島民が繋がることで、椿産業を中心とした昔からの暮らしや風土、歴史文化などが継承される一つのきっかけができるのではと考えている。

利島が独自に歩んできた定常人口300人の島を維持するために、今後どのように新陳代謝を図りながら、島づくりに取り組むべきかを、このレポートで少しでも明らかにしたい。

2. 利島村の概要

利島村は、東京都心の南方約130kmの海上に位置し、面積は4.12km²、周囲7.8kmの伊豆諸島に所在する1島1村の自治体である。面積は、全国の地方自治体の中で5番目に小さく、人口は3番目に少ない。地形は、円錐火山体斜面と周囲の海岸に面した海蝕岸から成り立っている。平らな土地がほぼなく、集落内の平均斜度は10度前後と急こう配である。村全体が階段状の椿林に覆われており、島の面積の約8割、その数は20万本と言われおり、冬になると島中で咲き誇る椿の花を見ることができる。また断崖絶壁が取り囲むため、定期船が就航したのも35年ほど前でしかない。



図1 利島村の位置

基幹産業である椿産業は、江戸時代から続いている。椿林の面積としては、長崎県五島列島や伊豆大島に比べて小さいが、島内で取れた実を100%使った椿油は、品質で、高い評価を得ており、生産量は日本一を誇っている。椿は、「冬に花が咲き、春から夏に実

をつくり、秋に種を落とす」。島民は、椿で四季を感じながら生活を営んできた。

3. 利島村の特徴

①人口推移とIターン移住者高度経済成長期の1960年から1970年の間にかけて、若者を中心に全体の人口の約30%にあたる人数が減少している。その後、1985年までに、人口が300人近くまで回復してから大きな増減はしていない。世帯数は、50年前に比べると、核家族化やIターン者が増えたことにより、約2倍に増えている。1985年以降、300人前後で推移していることから、利島村にとって300人という人数が、ひとつの定常人口と言えるのではないかと考えられる。

人口構成をみると、第2次ベビーブームより下の世代である30代が全体の18.6%でもっとも多く、そのうちの約7割がIターン移住者である。その次に多いのが、60代だが、その子どもの世代にあたる40代は人数が少ない。その理由として、年齢的に中学生以上の子を持つ世帯が多く、進学を控えた中で、学区を超えた積極的な引っ越しを望まないことが推測される。

Iターン者数は、2008年から2014年の間に45人がIターンしている中、現在も定住しているのは、男女合計26人で定着率は約60%である。これは、単身者が離職し、島外に転出する一方で、それを上回る夫婦世帯や子育て世帯が新たに島に移住してきたことが主な理由と言える。この期間に生まれた子どもの数は16人で、年平均2人の子どもの誕生している。近年は、Uターンで島

に戻る人も増えているが、過去30年間の中学校卒業生数を見ても、全体で85人しかいないため、今後もUターン者だけで人口増を望むことは、厳しい状況である。

2014年5月に発表された日本創成会議による将来推計人口では、あくまで人口移動が収束しないことが前提だが、利島村の2040年将来推計人口は229人と予測された。

※このレポートでいうIターン者とは、利島村以外で出生、または親が利島出身であつ

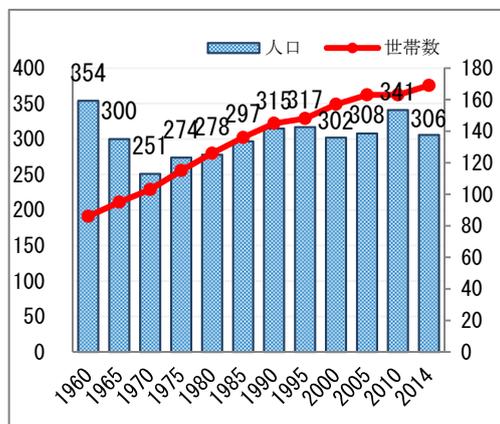


図2 利島村人口推移(国勢調査)

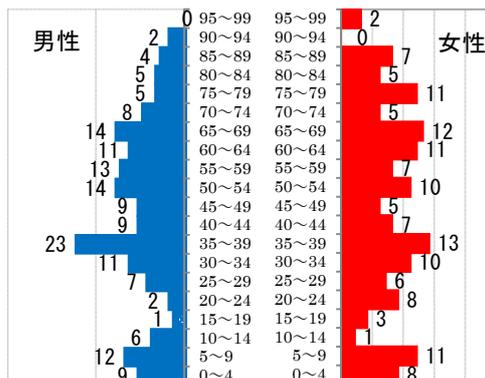


図3 人口男女別構成(2015年1月)



図4 Iターン転入出データ(男女別)

ても住民票が村にない状態で出生し就業等で利島村に転入した者、を言う。

② 椿産業の歴史と椿農家

伊豆諸島には、昔から田地がなく畑地のみであったが、島民の食糧にも足りないほどで、年貢を賦課することは不可能であった。そのため、江戸幕府は島の特産物を年貢として上納させた。利島では、絹で年貢を納めていたが、江戸時代後期に、生産物の中心は椿油に移行していった。この時期に、島の八合目あたりから集落までを椿の段々畑に整備していった。これにより雨などによる椿実の流出を防げるようになり、収穫が安易にできるようになったことも椿産業発展の一つの要因と考えられる。また段々畑にすることで、大雨が降った際に、山から集落に流れ落ちる水の勢いを制限する効果もあるため、防災の意味もあったとも言われている。

椿油は、江戸時代後期から年貢として江戸に送られ、髪油や食用の上等油として歓迎された。絹の生産は、相次ぐ自然災害により、桑や蚕に大きな被害を受けたせいで衰退していたこともあり、椿産業は島民にとって安定して多くの収入を得られるものとなり、現在まで、各椿農家において家業のように受け継がれている。利島の椿山は、厳しい自然環境の中での生活を強いられてきた当時の島民が、一丸となり形成した椿産業の礎であり、椿農家にとってかけがえのない財産となっている。椿林の土地を売却することは言うに及ばず、枝1本剪定することでさえ、良しとしない、強い思い入れのある椿農家が多い。

従事者は、60代以上の女性が多く、男性は定年後、また漁師であれば、漁業引退後に従事する仕事と言われており、現在は、高齢者の仕事だと認識されている。高齢化が進み、若い成り手も少ない状況の中、2013年から村の有志を中心に「利島活性化プロジェクト」と銘を打ち、学生ボランティアの受け入れを行なっている。この取組は、もともと体力が必要である夏季の下草刈り作業を主とした仕事をボランティアで担うものである。短期間ではあるが、2年間で2回実施した中で、200名近い学生が椿農家と一緒に作業を行った。椿農家の半数にあたる約20軒が受け入れ、今後も継続性を期待されている。

③ 住宅環境

全国的に過疎化が進む中、中山間地域や離島地域では空き家が急激に増えている。例えば新潟県粟島浦村の人口は350人程度であるが、ピーク時には1,000人近くであったこともあり、現在、空き家が増えている。一方で利島は、戦後から見ても、ある程度一定の人口で推移しているため、住宅数は大きく変わらず、空き家も数軒ある程度である。不動産業者も存在しないため、移住者は公営住宅や村営住宅に入るといった選択肢しかない。またUターンとは言え、親の住宅も限られた土地の中に建てられていることが多く、二世

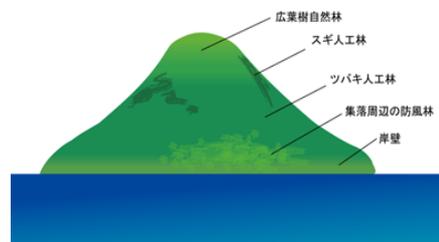


図5 植生のイメージ

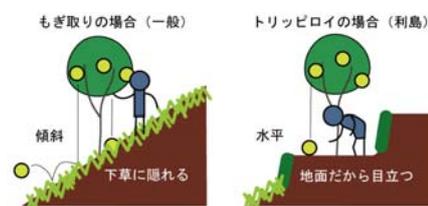


図6 土地造成にもたらす影響

帯住宅に増築することも難しい。

宅地は、島全体の面積の3%ほどしかなく、あっても既に住宅が建っている。また多くの土地が椿山であり、限られた土地に対する所有者の思い入れは強く、土地の売買は、高いハードルになっている。土地を手に入れた場合でも、島には、住宅販売会社、製材所、大工もないため、資材の運搬費、島外から職人を呼ぶ交通費や滞在費がかかるなど、建築コストが高くなるのが大きな障壁となっている。しかしこの先、高齢化が進めば、空き家が増えるため、リノベーションでの住宅再生など、今後対応策は必要になると推測される。

宅地	その他	公園等	未利用地等	道路等	農用地	水面	森林	原野
13	1.9	1.9	0.2	13.9	9.1	0.3	275.7	90.7
3.20%	0.47%	0.47%	0.05%	3.42%	2.24%	0.07%	67.79%	22.30%

表1 利島村の土地利用面積（平成19年）／単位 ha

④まとめ

このように、利島では、300人前後の人口を維持しつつ、代々受け継がれてきた椿山とともに、昔からの風土や文化が守られてきた。近年、Iターン者が増えたことで、住宅は足りなくなりつつある。しかし裏を返せば、限られた土地の中で、椿山を乱開発することなく、守ってきた証拠でもある。しかし、今後、椿農家の高齢化が進み、このまま後継者問題が解消しない場合、椿山の保全ができなくなる可能性が高い。それはこれまで守られてきた利島の暮らしを維持することが難しくなることでもある。

ではIターン者が椿産業に関わる可能性はあるのだろうか。また椿山・椿産業について、農家はどのように考えているのだろうか。そこで次章以降で、Iターン者ならびに椿農家に対して調査を行い、島の課題について考察する。

4. Iターン者の定住に関する意識調査

先述の通り、利島村は人口構成で30代がもっとも多く、その中でもIターンで移住をした子育て世代が人口の維持に貢献している。だが、利島には高校がないため、以前より、子どもの高校進学時に、島外へ転出する世帯があった。島で子育てをする限り、必ず直面する問題ではあるが、子育て世代の減少が進むと、小中学校の存続、村自体の存続にも繋がる可能性も出てくる。このアンケートでは、Iターン者の定住に関する考えや、定住し続けるための条件などを明らかにすることを目的として、調査を行った。調査対象者は平成10年以降に利島村に移住した20代後半から40代前半の49人を対象とし、40人から回答があった。調査期間は2014年11月末から12月中旬にかけて行った。（アンケートの詳細は別添資料を参照。）

「利島の住みやすさはどうか」との設問では、約70%の人が「住みやすい」、「まあまあ住みやすい」と回答した。続いて「利島に住み続けている理由は何か」との設問では、「自然環境が良い」が約25%と最も多く、「島民の人柄や気の合う仲間がいる」が12%と、自然環境が豊かなことや良好な人間関係が子育て世代にとって、重要な要件だと分か

る。また「仕事の都合」が15.7%、「安定した収入・好きな仕事がある」が13.3%と仕事が理由に移住してきた人も約30%いることが分かった。職種は限られても仕事があり、収入が得られるということが定住の大前提として必要であると考えられる。

また「島に住み続けたいか」の設問では、53%の人が「ずっと住み続けたい」、「できれば住み続けたい」と回答した。住みやすさを聞いた際には、約70%の人が住みやすいと答えたことに対して、「住みやすさ」と「住み続けたい」にはギャップがあることが分かった。これは「島外へ引っ越しをすると考えたときに当てはまる理由」の設問にも関連している。この設問で、もっとも回答が多かったのは「子どもの進学」で約20%であった。また「収入と合わせて島に留まるために必要な要件」の設問では、回答のあった子育て世代の全員が「子どもの高校、大学進学や在学への様々なサポート」を選択している。「子どもの高校進学」が、島に住み続けるための一つの分岐点だということが改めて分かった。

一方で「収入不足を解消するために副業をしたいか」の設問では、約30%が希望すると回答し、そのうちの42%が椿産業を副業にしたいと回答している。この理由としては、椿産業は年間を通した仕事だが、農機具を使う作業は、夏季の草刈り時の草刈機くらいで、その他の時期は、主に椿実を拾う作業のため、特別な技能を有する必要がほとんどない。そのような点で船上での作業が主になる漁業に比べると敷居が低い。椿産業を希望した人たちは、椿農家と一緒に作業することを希望する回答も多かった。

また「椿の間伐材などを使った特産品開発に関わってみたいか」との設問では、約半数が「主の仕事に支障が出ない範囲で関わってみたい」と回答した。椿油関連商品は、主にJA東京島しょ農業協同組合利島店（以下、農協）が商品開発を行っているが、農家やその他が中心となって行っている事例は一部を除いてないため、有志などで取り組むことができれば、今までにない新たな試みになる。

アンケート調査の結果をみると、Iターン者は今の生活に対して、仕事、自然環境、子育て環境など、軒並み満足度が高い結果となった。これは都会での社会人生活を経験したものであるからこそ、実感している部分ではないか。子どもの高校進学に限らず、今後どのようにして定住・定着率を高め、維持していくことができるか、検討する必要がある。

5. 農家の椿産業に関する意識調査

Iターン者へのアンケートでは、椿産業を副業にしたい人が一定数いることが分かったが、この調査では、椿産業の継続性や管理しきれなくなった椿山に対する椿農家の考え方などを調査した上で、後継者が少ない現状の中で、今後の椿山の管理や、椿産業の持続性の図り方を明らかにすることを目的とした。管理できない土地を椿農家が貸し出すことができれば、希望するIターン者をマッチングすることも可能性も考えられる。なお、調査は50代以上の椿農家を対象とし、11軒でヒアリングを行った。

まず椿産業の継続性、後継者について聞いたところ、ほとんどの椿農家は、「子どもに継いでもらいたい」と考えているが、「子どもが島外にいるため、どうなるか分からない」、「むしろ現実的には厳しい」とのことであった。また「自分の子どもが帰って来ない場合は、誰かしらに椿山を管理してもらいたい」と考えている方が多数であった。椿山の貸し

借りなどについて聞いたところ、聞き取りを行った全農家で「無償での貸し出し」について問題ないとの見解であった。利島では、管理できず放棄された山をウッチャリ山（捨て山）というが、代々受け継いできた土地をウッチャリ山にはしたくないとの意見が圧倒的に多かった。第三者への椿山の管理をお願いする場合、管理をしてもらえるのであれば、地代や手数料の徴収も考えていないとのことであった。利島では、秋に落ちた椿実を収穫するのが特徴で、夏季は椿山の草刈の時期になる。草刈りをせずに、ウッチャリ山にした場合、椿実を拾える状態に戻すには、時間と労力がかかることや害虫などが発生しやすい環境になる。ひとつの椿山に対して、四方を他の椿農家が所有する椿山に囲まれており、点在した椿山を保有しているため、特に重点的に管理されている。

椿産業の収入について聞いたところ、椿産業の収入を考えると、本業にすることは難しく、積極的に子どもを跡取りに、とはできない状況である。これは新たに島外から椿産業を本業にしたいとの希望を持ったとしても難しいといえる。椿実を肥やしをやらずともできるもので、椿実を拾う作業は、高齢者でもできる仕事である。生涯現役で働く人が多いのは、先祖から受け継いできた仕事に加え、身体的負担が比較的軽いことも理由であろう。

このヒアリングから感じたのは、椿農家の熱い想いであった。「椿産業を自分の代で終わるようにはしたくない。」「子どもが継げないときは、誰かに管理してもらうことで、椿山を維持していってもらいたい。」と、話をお伺いした、全ての農家が同じように、椿山に対する切実な気持ちを口にしていた。（ヒアリングの詳細は別添資料を参照。）

6. アンケート・ヒアリングから浮き彫りになった課題

前章では、Iターン者が住み続けるために必要な支援について、また椿農家が抱える課題についての調査結果を紹介した。この章では、調査結果を踏まえて、島特有の子育て環境や教育環境、椿産業の後継者不足からみる持続可能性に対してなど、次世代へ繋げるために、クリアしなければならない課題について明らかにしたい。

①子育て世代が直面する「15の春」

島には教育施設が中学校までしかなく、近隣の島にある高等学校に船で通学することはできないため、子どもたちは中学校を卒業する3月に、15歳で島から離れることになる。ここで問題となるのは、両親も一緒に島を出て行く可能性があることだ。二重生活になることでの経済的な負担増や、15歳で親と離れることを懸念するなど理由は様々である。子どもが進学を理由に巣立っていくことは、小規模の離島として、宿命ではあるが、親と一緒に島を出て行くことは、村にとっても大きな損失になる。Iターン者へのアンケートの中で、「利島は住みやすい」と回答した人の割合に比べて、「利島に住み続けたい」と回答した人が約20%下落していた。まさしく、「15の春」の際に親自身も島から出ることを想定しているのではないかと考えられる。現在、子どもの数は、増加傾向だが、谷間の世代も存在しており、小学校では2学年（小学5年生、6年生）が欠学年となっている。

利島にとって子育ては、地域ぐるみで行うものである。15歳で島から出るまでに、地域の人達とどれくらい関わり、繋がりを持てたことが重要で、利島を「ふるさと」と感じ

て旅立っていく子どもか、そうでない子どもでは、将来利島に帰ることへの意識の差が表れるのではないか。親戚がいないIターン子育て世代でも、島の人と繋がりを築ければ、安心・安全の子育てが実現でき、将来に向けた繋がりを構築できるだろう。

② 椿農家の後継者問題

ヒアリング調査を行った結果、現時点で後継者のいる椿農家は少ないことが明らかになった。確実に高齢化は進んではいるが、現状は、椿山の管理ができているため、悲観的な椿農家は少なかった。しかし椿農家の高齢化率は、約70%もあるため、楽観視できる状態ではない。椿の仕事は、歳をとってもできると言われているとはいえ、高齢化が進めば、体力低下などにより、管理できない椿山が増えることが懸念される。またこの先、10年から15年もすると亡くなる人も椿農家も増え、一気に椿産業衰退する危険性が高いことが分かった。椿山が管理できなくなると、雑草が生い茂るウッチャリ山が増え、椿の葉を食べる害虫の発生なども懸念される。昔から利島の生活や暮らしを支えてきた椿産業の衰退は、江戸時代から守ってきた椿山を失い、島の風土や文化まで失われていく問題として捉える必要がある。椿農家ごとでの後継者不足の改善が進まないことを前提として、この先どのような形であれば椿山を維持し続けることができ、将来にわたり椿産業を守り続けていくことができるのか改めて考える必要がある。

③ 収入からみえる椿産業の非本業化

ヒアリング調査を行った結果、椿の仕事で得られる収入は、それほど多くないため、現状では本業にできないということが示された。専業で従事している椿農家は年金受給者世代で、それ以外の椿農家は、本業を持ちながら空いた時間などに従事している。椿樹の育成は時間もかかり、椿実の成る量は、自然に左右される部分が多いこともあるため、年金受給者世代が主な従事者になっていると考えられる。また椿農家に生産量に伴い収入として入ってくるのは、椿実から搾油した椿油を農協が買い取る時だけである。しかもこの買い取りは年1回しかないため、その間をどう食い繋ぐかが問題である。また椿実だけの買い取りは行っていないため、現状は、搾油した椿油を農協に買い取ってもらうか、椿農家自身で引き取るかの2択となっている。椿農家自身は、椿油を販売する独自のルートを持っていないため、ほとんどが農協に買い取ってもらっているのが現状である。

Iターン者へのアンケートでは、副業をしたい人の42%が椿産業を希望すると回答している。この結果は、今後の椿山の維持管理に向けて大きな可能性を秘めている。前述した副業で椿産業を希望する「やる気のある人」を今後の椿産業に活かせるかが大事である。

④ 世代間交流の少なさ

自分の周りや地域に住んでいる人の名前と顔が一致することが、そこでの生活や子育ての安心安全のパロメーターに繋がる。利島は人口が300人と限られていることもあり、隣に誰が住んでいるか知らないということはない。今回椿農家にヒアリング調査を行ったが、その際に「最近知らない人が増えた」と仰る椿農家さんが多くいた。実際に、Iタ

ーン者の多くの30代は、椿農家とは、きっかけがない限り、交流することも少ないのが現状である。Iターン者は子育て世代、椿農家は、既に子育てが終わった世代であることも原因の一つだと言える。またUターン者は、該当する人数も少ないため、今後も大きな増加は見込めない。高齢化が進む椿農家と、Iターン者が繋がれば、島に残る昔からの生活や暮らし、歴史や文化など、将来的にわたり伝えていくことも可能性が広がる。

7. 持続可能な島を目指すために

今回、アンケートやヒアリングを行った結果、様々な課題が浮き彫りになった。その中で、Iターン子育て世代の場合、子どもの高校進学時にあわせた島からの転出は、必ず直面する課題として悩み続けながらも、島特有の生活を気に入っている世帯が多いことが分かった。一方で、椿農家は椿産業での収入が少ないこともあり、積極的に自分の子どもに継がせることもできない中、「椿山は維持したい」というジレンマを抱えている。椿産業が継続できなくなれば、それにより培われてきたものまで失われる恐れがある。利島独自の課題だからこそ、島の繋がりを最大限活かすことで、解決方法を探る必要がある。では、実際に具体的な利島で今後取り組むべき事案について提言したい。

① Iターン者による椿山の管理と新商品開発による価値創造活動

まずは、椿産業を副業にしたい人を募集し、共同で椿山の管理を実施したい。この取組は、Iターン者だけで行なうことではなく、椿農家にも協力を仰ぎ、管理方法などの助言をもらう。また椿山に対する椿農家の想いを知る機会をつくりたい。副業を希望した人たちは、単純に収入不足を解消するために希望されたと思う。しかし椿農家の想いを知ること、椿産業をより身近に感じることや、受け継がれてきた価値を理解することで、これからこの先の世代へ繋いでいくことが、もっとも大切なことだと感じてもらいたい。

また「利島の椿を創造する」をコンセプトに、利島の生活に根付いた椿の持つ魅力や椿油の価値などを改めて考える会合を持ちたい。「利島だからこそその椿油とは何か」など、毎回テーマを設けながら、ブランディングやマーケティングを考え、椿の新たな方向性を見出させるような取組を目指す。Iターン者のように、外からの視点を持った人と、椿に関する知識や経験を持つ椿農家をそれぞれ活かすことで、新たな価値創造の取組になると期待したい。将来的に、新商品を開発した際には、村が年3回程度参加しているイベントで試供品の提供やアンケート調査をすることも可能である。まずは自分自身で椿山の管理について椿農家へ話しに行くことから始めたい。椿農家と様々な話をするだけでも、自分にとって、新たな気づきを与えてもらえる貴重な機会となるだろう。

② 体験事業がもたらす椿産業の新たな可能性

長崎県小値賀町では、「島のくらし丸ごと体験」をテーマとした民泊を行っている。農家や漁家では、宿泊者への食材提供のために釣りや野菜の収穫など島の日常を体験することが大変人気となっている。農業・漁業体験や民家に泊まることが島外の人にとって価値あるものであると証明してくれている事例である。

椿産業は、いわゆる稲作農業のように全国各地にはないため、椿産業＋離島というところに、より価値を感じる層がいるのではないかと期待したい。また民泊を行うことで、副収入や労働力を得られ、椿産業の維持に貢献する形となる。第3章で触れたが、2013年より行っている「利島活性化プロジェクト」の中で、当初は、「本当に手伝いに来る人がいるのか」と半信半疑だった椿農家も、一生懸命に働く学生を目の当たりにし、自分たちが普段行っている仕事を改めて考える機会にもなり、このような体験を求めている人がいることを初めて知った。この取組がきっかけで、椿農家にも農業体験を受け入れるための気持ちの下地が出来つつある。椿産業は、一年を通じた仕事であるため、椿を活かした農業体験の取組ができると期待している。小規模ではあっても交流人口が拡大することを土台とし、将来的には椿産業の継続性にも寄与することで、定常人口の維持にも繋げていく取組にしたい。まずは、椿農家に対して農業体験に対する潜在的な意識の調査からはじめたい。

③多様で多角的な子育てサポート

1. 島での子育て環境の再考

利島では、昔から両親ともに山や海仕事に出ていたため、子どもが生まれる前から子守を他家に依頼していた。子守のことを利島の幼児言葉で「ボイ」と呼び、この関係は子守が終了しても一生継続し、血縁上に繋がりがなくとも親戚と同じような付き合いをする。今は保育園もあるため、当時のように子守が必要な子どもはいないが、名残としては、残っている。Iターン子育て世代は、島に親戚もいないため、この利島独自の文化ともいえるボイ制度は、人と人との繋がりをつくり、子どもに多様な居場所をつくるきっかけのひとつになると考える。実際にボイがいる島の子どもたちは、大人になってからも親戚のような関係が続いている。Iターンの子どもたちにとって利島が「ふるさと」になるためには、こうした繋がりがもっとも大切ではないか。まだ私自身の子どもにも「ボイ」がないので、今後、お世話になっている方に相談しながら検討を進めたい。

2. 空き家リノベーションによる子どもの拠点づくり

高校進学時の多角的で多様なサポートも重要である。鹿児島県十島村では通学、下宿、学校寮を利用している生徒の保護者の経済的負担を軽減することを目的に支援金制度が整備されている。また新潟県粟島浦村では村独自で寮を整備している。寮には、管理人も常駐し、子どもたちのサポートを行っている。利島でも現在、国の離島修学支援金の制度を活用し、1人に付き毎月3万円の支援を行っているが、都心での単身者の平均家賃は約7万円と言われ、半額にも満たない状況であるため、プラスアルファのサポートが必要である。昭和26年に「島しょ教育振興に寄与する」という目的のもと、東京の島の子どもを対象とした「七島学生寮」が存在していたが、老朽化による大規模改修が困難なことや財政面で継続運営ができないと判断され、平成16年に廃止された。だが、七島学生寮は、島外へ生活拠点を移す子どもや、島に残る親にとっても経済的な支援以上に役割が大きかったと推測される。そうしたことを考慮し、都心に1軒家の空き家が多いことを活用し、

クラウドファンディングなどで資金を集め、親子や島民を中心にリノベーションによる、島の子どものためのシェアハウス兼拠点づくりを企画したい。親も短期滞在できるようにすることで、島から離れても繋がりを持てるツールのひとつになりうるのではないか。私の子どもも14年後には、島から旅立っていく。島の子どもたちが安心して島から出て行き、また帰って来られる環境整備を進めることが必要である。今後も子育て世代に対しては、さらなる調査を行いながら、定住定着について模索していきたい。

8. おわりに

今回、人口300人の定常状態である利島で、今後も持続可能な地域を維持するために、直面する椿農家の後継者問題や、増加しているIターン者と椿農家を繋げることで、利島独自の持続可能な社会を築くための重要なポイントになると考え、レポート制作を行った。アンケートやヒアリング結果からは、椿農家の高齢化や後継者不足は、現状抜本的に解決することが難しい一方で、本業を持つIターン者が、ある一定の担い手になれる可能性が見えてきた。椿産業の継続性をはじめ、椿農家に様々な話を伺ったが、「自分たちが椿の仕事が出来なくなっても、誰かしらに継続管理してもらい、椿山を守って行ってほしい」と、淡々と熱い想いを語ってくれた。またその際には、椿産業の話に限らず、昔の島での暮らしをはじめ、様々な話を聞かせてくれた方が多く、特に年配世代が世代間の交流を求めていると感じた。私自身は前述した「利島活性化プロジェクト」の受入れ対応を、島の有志と共同で行っていることもあり、椿農家とは、この2年間で様々な話をしてきた。これからは、Iターン者と椿農家を繋げる役目も担いながらも、自分自身も地域に飛び出し、農家の持つ知恵など様々なことを学び続けたい。そして過去から受け継がれてきたものを次世代へと繋げていきたい。自分自身がIターン者の一人として、懐かしくも新しい、持続可能な利島の未来を創っていきたい。

9. 参考文献・ホームページ

- ・ 東京大学大学院 農学生命科学研究科 森林科学専攻 森林風致計画学研究室
地域森林景観 ツバキで覆われた島～東京都利島村～
(<http://www.fuuchi.fr.a.u-tokyo.ac.jp/lfl/report/2007toshima/index.html>)
- ・ 東京都 東京の土地利用 平成19年多摩・島しょ地域
(http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/seisaku/tochi_c/tochi_2.htm)
- ・ 利島村『利島村史 通史編』 利島村 平成8年
- ・ 利島村『利島村統計調査表』 利島村 平成24年
- ・ 十島村 十島村高校生修学支援金
(http://www.tokara.jp/reiki_int/reiki_honbun/q719RG00000575.html#e000000067)
- ・ 特定非営利活動法人おちかアイランドツーリズム協会 小さな島の大きな挑戦
(http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/binosato/b_maturi/pdf/h24_n_daizin11.pdf)

【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（Iターン移住者が対象）

利島村における定住に関する意識調査

実施期間 11月下旬

実施対象 平成10年以降（過去16年間）のIターン定住者で20代前半～40代前半

※学校教員、駐在など異動で入れ替わる方は対象外となります。

実施方法 アンケート用紙の配布

設問に当てはまる選択肢を回答欄にご記入ください。

設問	回答欄	選択肢
問1	性別	①男性②女性
問2	年齢	①20代前半②20代後半③30代前半④30代後半⑤40代前半
問3	家族構成	①夫婦のみ②1人暮らし③その他
問4	住まい	①持家②賃貸
問5	職業形態①	①農林業②漁業③公務員④サービス業⑤無職 ⑥その他（ ）
問6	職業形態②	①自営業②正社員・正職員③契約社員・パート・アルバイト

設問	回答欄	選択肢
問7	利島に移住前に来たことありますか？	①来たことはない ②面接で来た ③観光で来た ④仕事で来た ⑤知り合いがいるので来た
問8	利島に移住してどれくらいですか？	①1年未満 ②1～3年 ③4～6年 ④7～9年 ⑤10年以上
問9	利島に引っ越してきた理由は何ですか？	①仕事に就くため、起業するため ②結婚のため ③島の気候や生活が気に入ったため④子どもの教育のため ⑤島民の人柄が気に入ったため ⑥本土の生活が嫌になった
問10	利島の住みやすきはどうか？	①住みよい ②まあまあ住みよい ③どちらとも言えない ④あまり住みよいとは言えない ⑤住みにくい ⑥分からない
問11	利島に住み続けたいと思いますか？	①ずっと住み続けたい ②できれば住み続けたい ③どちらとも言えない ④できれば住み続けたくない ⑤住み続けたくない ⑥分からない ⑦自由回答 →
問12	利島に住み続けている理由として該当するとして何がありますか？ ※複数回答可	①島に住みなれたから ②自然環境が良い ③島民の人柄や気の合う仲間がいる ④親や親戚がいるから⑤仕事の都合 ⑥教育環境が良い ⑦子育て環境が良い ⑧福祉環境が良い⑨医療環境が充実している ⑩安定した収入・好きな仕事がある ⑪島民の人柄や気の合う仲間がいる ⑫特に魅力は無い ⑬自由回答 →
問13	島外へ引っ越しをすると考えたときに当てはまる理由はありますか？ ※複数回答可	①子どもの進学 ②親や親せきと暮らすため ③住宅の家賃が高い ④仕事がない⑤日常生活に必要な施設やモノが不足して不便 ⑥人間関係が良くない⑦子育て環境が良くない ⑧教育環境が良くない ⑨福祉環境が良くない ⑩医療環境が良くない ⑪島が発展するとは思えないから ⑫分からない ⑬引っ越しは考えていない ⑭自由回答 →
問14	利島に住み続けるために必要なことは何ですか？ ※複数回答可	①交通機関の安定性 ②子育て支援の充実 ③医療施設の充実 ④老人福祉施設の充実⑤教育環境の充実 ⑥働く場所の確保 ⑦防災体制の充実 ⑧自由回答 →
問15	現在の収入に満足していますか？	①かなり満足 ②やや満足 ③やや不満 ④かなり不満
問16	収入不足を解消するために副業をしたいですか？	①したい ②できるならしたい ③あまりしたくない ④したくない ⑤既に副業をしている ⑥収入不足解消する目的ではなく、趣味や特技を生かすための副業をしたい
問17	利島で副業をするとしたら何がしたいですか？	①椿産業 ②漁業 ③その他 →
問18	椿産業を選択した方にお聞きします。やってみたい作業はありますか？	①椿山の下草刈り作業 ②椿実を拾う作業 ③椿油の充てん・梱包作業 ④自由回答 →
問19	椿産業を副業とした場合、どれくらいの収入が理想ですか？	①30万円以下 ②31～50万円 ③51～80万円 ④81～100万 ⑤101万以上

アンケートのご協力ありがとうございました。提出は役場の荻野までお願いいたします。

【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（Iターン移住者が対象）

利島村における定住に関する意識調査

定住促進施策を実施していない利島村で、増加しているIターン定住者に定住している理由や今後も住み続けるために何がポイントになるかのアンケート・ヒアリングを行いどういった点に魅力を感じているか紐解く。
また年収や副業についてのアンケートも行い、椿産業を副業としてなり得るのか可能性を探る。

実施期間 11月下旬

実施対象 平成10年以降（過去16年間）のIターン定住者で20代前半～40代前半
※学校教員、駐在など異動で入れ替わる方は対象外となります。

実施方法 アンケート用紙の配布

回答者

男性	21	52.5%
女性	19	47.5%
	40	100.0%

年齢

20代前半	3	7.5%
20代後半	4	10.0%
30代前半	10	25.0%
30代後半	17	42.5%
40代前半	6	15.0%
	40	100.0%

家族構成

夫婦のみ	9	22.5%
1人暮らし	8	20.0%
その他	23	57.5%
	40	100.0%

住宅環境

持家	5	12.5%
賃貸	35	87.5%
	40	100.0%

職業形態①

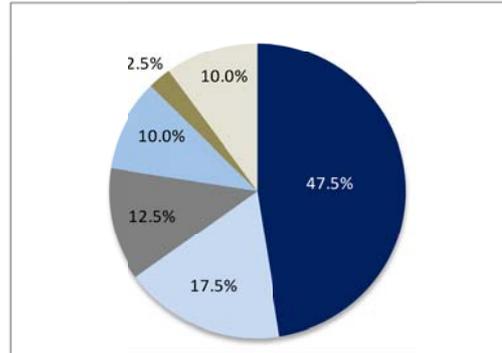
農林業	2	5.0%
漁業	1	2.5%
公務員	13	32.5%
サービス業	16	40.0%
無職	2	5.0%
その他	6	15.0%
	40	100.0%

職業形態②

自営業	6	15.0%
正社員・正職員	29	72.5%
契約社員・パート・アルバイト	5	12.5%
	40	117.6%

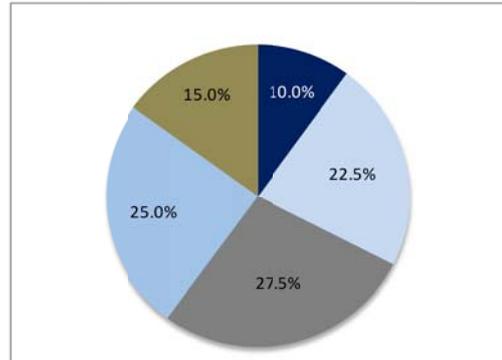
利島に移住前に来たことありますか？

①来たことはない	19	47.5%
⑤知り合いがいるので来た	7	17.5%
③観光で来た	5	12.5%
②面接で来た	4	10.0%
④仕事で来た	1	2.5%
⑥不明	4	10.0%
	40	100.0%



利島に移住してどれくらいですか？

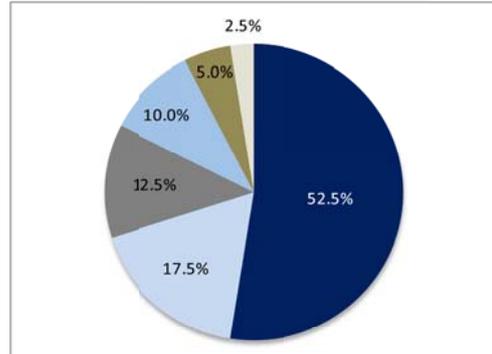
①1年未満	4	10.0%
②1～3年	9	22.5%
③4～6年	11	27.5%
④7～9年	10	25.0%
⑤10年以上	6	15.0%
	40	100.0%



【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（Iターン移住者が対象）

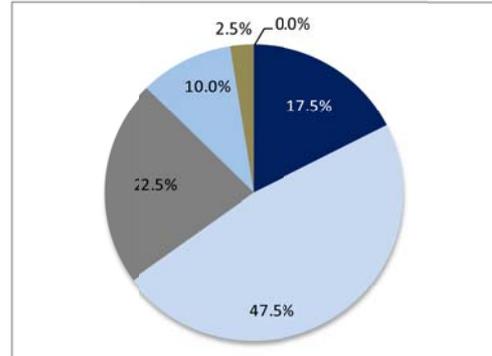
利島に引っ越してきた理由は何ですか？

①仕事に就くため、起業するため	21	52.5%
③島の気候や生活が気に入ったため	7	17.5%
②結婚のため	5	12.5%
④子どもの教育のため	4	10.0%
⑤島民の人柄が気に入ったため	2	5.0%
⑥本土の生活が嫌になった	1	2.5%
	40	100.0%



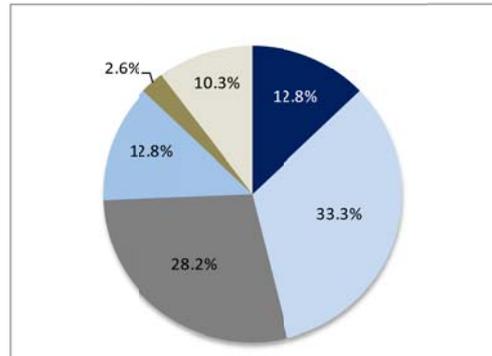
住みやすさはどうですか

①住み良い	7	17.5%
②まあまあ住み良い	19	47.5%
③どちらともいえない	9	22.5%
④あまり住み良いとは言えない	4	10.0%
⑤住みにくい	1	2.5%
⑥分からない	0	0.0%
	40	100.0%



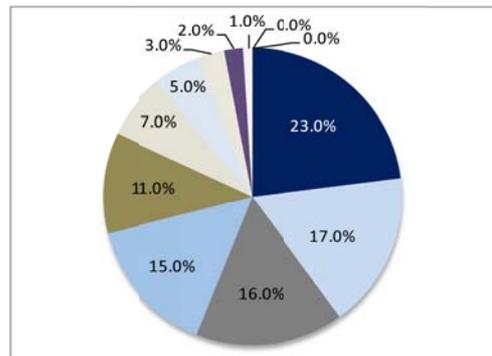
住み続けたいと思いますか

①ずっと住み続けたい	5	12.8%
②できれば住み続けたい	13	33.3%
③どちらとも言えない	11	28.2%
④できれば住み続けたくない	5	12.8%
⑤住み続けたくない	1	2.6%
⑥分からない	4	10.3%
	39	100.0%



住み続けている理由について

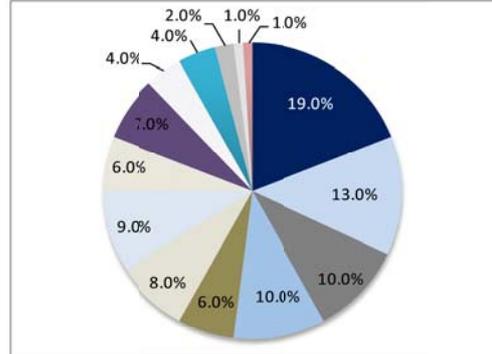
②自然環境が良い	23	23.0%
⑤仕事の都合	17	17.0%
①島に住み慣れたから	16	16.0%
⑩安定した収入・好きな仕事がある	15	15.0%
⑦子育て環境が良い	11	11.0%
③島民の人柄や気の合う仲間がいる	7	7.0%
④親や親戚がいるから	5	5.0%
⑬自由回答	3	3.0%
⑥教育環境が良い	2	2.0%
⑫特に魅力はない	1	1.0%
⑧福祉環境が良い	0	0.0%
⑨医療環境が充実している	0	0.0%
	100	100.0%



【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（Iターン移住者が対象）

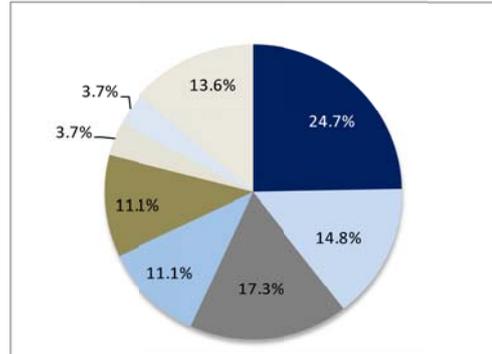
島外への引っ越しについて

①子どもの進学	19	19.0%
②親や親戚と暮らすため	13	13.0%
④仕事がない	10	10.0%
⑩医療環境が良くない	10	10.0%
③住宅の家賃が高い	6	6.0%
⑥人間関係が良くない	8	8.0%
⑤日常生活に必要な施設等の不足	9	9.0%
⑧教育環境が良くない	6	6.0%
⑪島が発展するとは思えない	7	7.0%
⑫分からない	4	4.0%
⑬引っ越しは考えていない	4	4.0%
⑦子育て環境が良くない	2	2.0%
⑨福祉環境が良くない	1	1.0%
⑭自由回答	1	1.0%
	100	100.0%



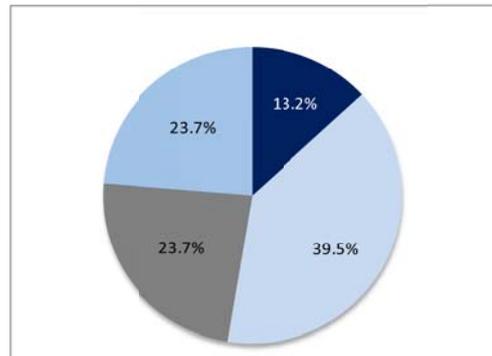
住み続けることに必要なことは

①交通機関の安定	20	24.7%
⑥働く場所の確保	12	14.8%
③医療施設の充実	14	17.3%
②子育て支援の充実	9	11.1%
⑤教育環境の充実	9	11.1%
④老人福祉施設の充実	3	3.7%
⑦防災体制の充実	3	3.7%
⑧自由回答	11	13.6%
	81	100.0%



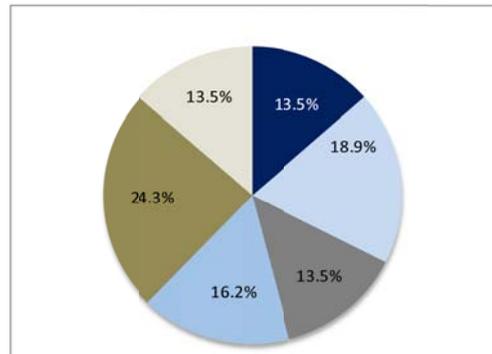
今の収入に満足していますか

①かなり満足	5	13.2%
②やや満足	15	39.5%
③やや不満	9	23.7%
④かなり不満	9	23.7%
	38	100.0%



収入不足を解消するために副業をしたいか

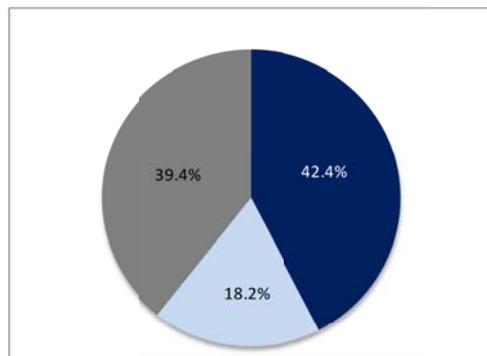
①したい	5	13.5%
②できるならしたい	7	18.9%
③あまりしたくない	5	13.5%
④したくない	6	16.2%
⑤既に副業をしている	9	24.3%
⑥趣味や特技を生かすための副業をしたい	5	13.5%
	37	100.0%



【参考資料】 利島村における定住に関する意識調査（Iターン移住者が対象）

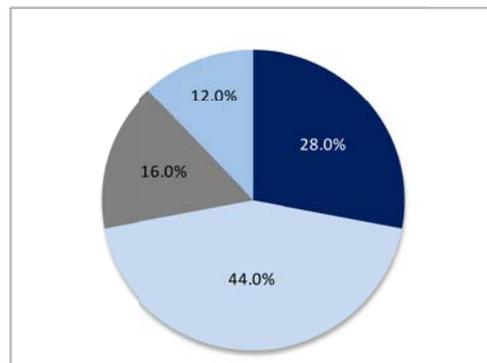
何を副業にしたいですか

① 椿産業	14	42.4%
② 漁業	6	18.2%
③ その他	13	39.4%
	33	100.0%



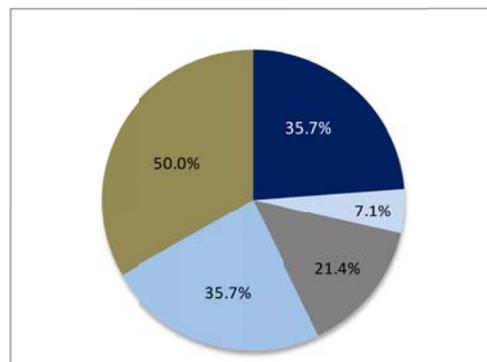
椿産業では何をしてみたいですか

① 下草刈り作業	7	28.0%
② 椿実を拾う作業	11	44.0%
③ 椿油の充填・梱包差長	4	16.0%
④ 自由回答	3	12.0%
	25	100.0%



椿産業を副業とした場合、どれくらいの収入が理想ですか？

① 30万円以下	5	35.7%
② 31～50万円	1	7.1%
③ 51～80万円	3	21.4%
④ 81～100万円	5	35.7%
⑤ 101万円以上	7	50.0%
	14	100.0%



【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（追加①）

利島村における定住に関する意識調査（追加調査）

・追加アンケート①

実施期間 12月中旬

対象 11月下旬にアンケートを行った際に問13（島外へ引っ越しをすることを考えたときに当てはまる理由はありますか？）で④引っ越しは考えていないと回答された方以外にお聞きします。

実施方法 アンケート用紙の配布

設問	回答欄	選択肢
性別		①男性②女性
年齢		①21～24歳②25～29歳③30～34歳④35～39歳⑤40～44歳
家族構成		①夫婦のみ②1人暮らし③その他
住まい		①持家②賃貸
職業形態		①農林業②漁業③公務員④サービス業⑤無職 ⑥その他（ ）

設問に当てはまる選択肢を回答欄にご記入ください。

	設問	回答欄	選択肢
問1	今より多くの収入が得られるなら、島外への引っ越しを留めますか？		①留まる ②留まらない ③所得の問題ではない ④分からない ⑤自由回答（ ）
問2	問1で①を選択した方にお聞きします。留まるために今の収入にどれくらいのプラス収入（年間）を望みますか？		①30万円以下 ②31～50万円 ③51～80万円 ④81～100万円 ⑤101～150万円 ⑥151～200万円 ⑦201～250万円 ⑧251～300万円 ⑨301万円以上
問3	収入と合わせて島に留まるために必要な要件はありますか？		①住宅建設するための土地 ②親と住める住宅 ③医療・福祉の充実 ④子どもの高校、大学進学や在学への様々なサポート ⑤島民同士のより良い人間関係 ⑥交通機関の就航率向上 ⑦問題は収入のみ ⑦自由回答（ ）

・追加アンケート②

※副業を希望しない方、椿産業の副業を希望しない方は無記入でお願いします。

実施期間 12月中旬

対象 11月下旬にアンケートを行った際に問17（収入不足を解消するために副業をしたいと思いますか？）で①したい、②できるならしたいと回答し、問18で①椿産業と回答した方にお聞きします。

実施方法 アンケート用紙の配布

設問に当てはまる選択肢を回答欄にご記入ください。

	設問	回答欄	選択肢
問4	副業として椿産業をする場合、農家さんと一緒に作業することをどうお考えですか？		①問題ない ②できれば一緒にやりたい ③できれば一緒にやりたくない ④個人でやりたい ⑤農家さん以外の仲間と一緒にやりたい ⑥自由回答（ ）
問5	問4で①、②を選択した方にお聞きします。一緒に作業しても良い仕事内容はありますか？		①下草刈り作業（切り払い作業） ②椿実の収穫作業 ③椿実の搬出作業 ④椿樹の管理（間伐作業、苗木の植樹など） ⑤自由回答（ ）
問6	現在販売されている利島の椿油商品について印象はどうですか？		①とても良い ②良い ③あまり良くない ④良くない ⑤自由回答
問7	具体的にはどのような印象をお持ちですか？		デザイン（ イメージ（ 価格（ 使用感（ その他（ （
問8	現任副業としてやられている方はいませんが、椿の間伐材や油粕、椿油を使った特産品開発に関わってみたいと思いますか？		①思う ②少し思う ③思わない ④まったく思わない ⑤自由回答（ ）
問9	問8で①、②を選択した方にお聞きします。どのジャンルで関わってみたいですか？		①椿油商品のデザイン開発 ②椿油を配合した加工品開発 ③椿油の売り出し方や展開 ④間伐材を使った加工品開発（木工品開発・炭の製造） ⑤油粕を使った商品開発 ⑥その他（ ）
問10	問8で①、②を選択した方にお聞きします。どの程度関わりたいと考えていますか？		①主の仕事として関わりたい ②主の仕事に支障が出ない程度なら関わってみたい ③アンケートや調査に協力する程度（趣味の範囲）であれば関わってみたい ④副業として成り立つなら関わりたい ⑤自由回答（ ）

アンケートのご協力ありがとうございました。提出は役場の荻野までお願いいたします。

【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（追加①）

利島村における定住に関する意識調査（追加調査）

・追加アンケート①

実施期間12月中旬

対象 11月下旬にアンケートを行った際に問13(島外へ引っ越しを考えると当てはまる理由はありますか?)
で③引っ越しは考えていないと回答された方以外にお聞きします。

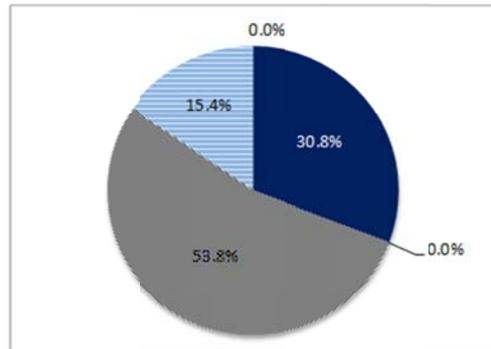
実施方法アンケート用紙の配布

回答者

男性	9	64.3%
女性	5	35.7%
	14	100.0%

今より多くの収入が得られるなら、島外への引っ越しを留めますか？

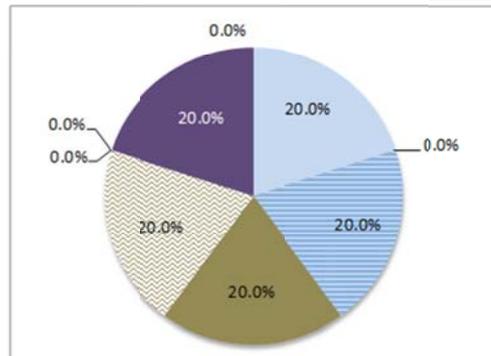
①留まる	4	30.8%
②留まらない	0	0.0%
③所得の問題ではない	7	53.8%
④分からない	2	15.4%
⑤自由回答	0	0.0%
	13	100.0%



前問で①を選択した方にお聞きします。

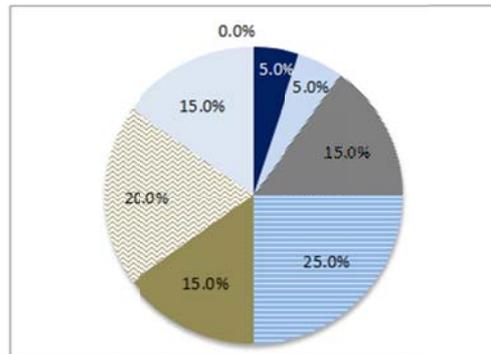
留まるために今の収入にどれくらいのプラス収入（年間）を望みますか？

①30万円以下	0	0.0%
②31～50万円	1	20.0%
③51～80万円	0	0.0%
④81～100万円	1	20.0%
⑤101～150万円	1	20.0%
⑥151～200万円	1	20.0%
⑦201～250万円	0	0.0%
⑧251～300万円	0	0.0%
⑨301万円以上	1	20.0%
	5	100.0%



収入と合わせて島に留まるために必要な要件はありますか？

①住宅建設するための土地	1	5.0%
②親と住める住宅	1	5.0%
③医療・福祉の充実	3	15.0%
④子どもの高校、大学進学や在学への様々なサポート	5	25.0%
⑤島民同士のより良い関係	3	15.0%
⑥交通機関の就航率向上	4	20.0%
⑦問題は収入のみ	3	15.0%
⑧自由回答	0	0.0%
	20	100.0%



【参考資料】 利島村における定住に関する意識調査（追加②-1）

・追加アンケート②

※副業を希望しない方、椿産業の副業を希望しない方は無記入をお願いします。

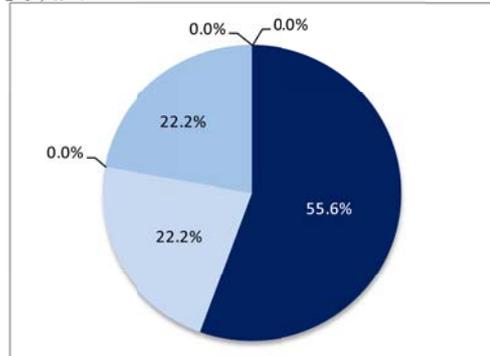
実施期間 12月中旬

対象 11月下旬にアンケートを行った際に問17(収入不足を解消するために副業をしたいですか?)
で①したい、②できるならしたいと回答し、問18で①椿産業と回答した方にお聞きします。

実施方法 アンケート用紙の配布

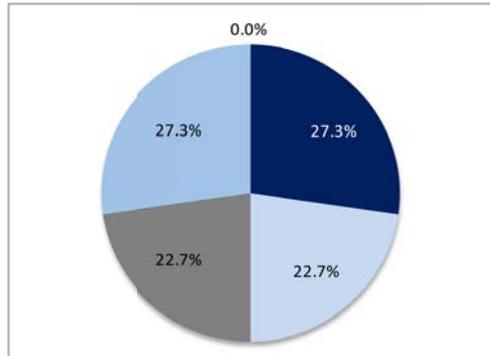
副業として椿産業をする場合、農家さんと一緒に作業することをどうお考えですか？

①問題ない	5	55.6%
②できれば一緒にやりたい	2	22.2%
③できれば一緒にやりたくない	0	0.0%
④個人でやりたい	2	22.2%
⑤農家さん以外の仲間と一緒にやりたい	0	0.0%
⑥自由回答	0	0.0%
	9	100.0%



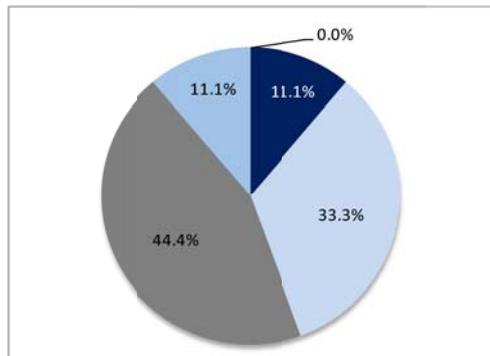
前問で①、②を選択した方にお聞きします。
一緒に作業しても良い仕事内容は何ですか？

①下草刈り作業（切っ払い作業）	6	27.3%
②椿実の収穫作業	5	22.7%
③椿実の搬出作業	5	22.7%
④椿樹の管理（間伐作業、苗木の植樹等）	6	27.3%
⑤自由回答	0	0.0%
	22	100.0%



現在販売されている利島の椿油商品について印象はどうですか？

①とても良い	1	11.1%
②良い	3	33.3%
③あまり良くない	4	44.4%
④良くない	1	11.1%
⑤自由回答	0	0.0%
	9	100.0%



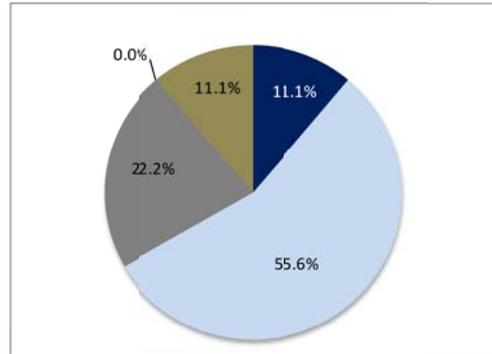
【参考資料】利島村における定住に関する意識調査（追加②-2）

具体的にどのような印象をお持ちですか？

デザイン	→	ダサい	没個性的	和風	シンプル
イメージ	→	伝統ある天然素材	大きい	大きい	高級
価格	→	高い	高級品	高い	高い
使用感	→	独特	微妙	手頃でない	良い
その他	→	手ごろに使えない	他に種類を増やすべき		

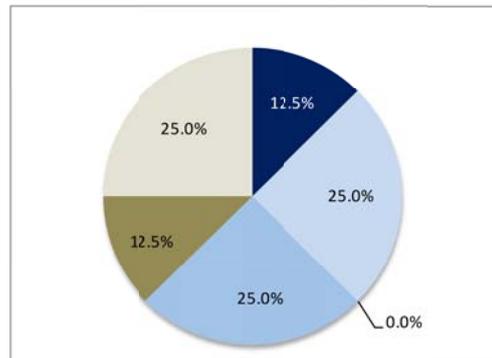
現在副業としてやられている方はいませんが、椿の間伐材や油粕、椿油を使った特産品開発に関わってみたいと思いますか？

①思う	1	11.1%
②少し思う	5	55.6%
③思わない	2	22.2%
④まったく思わない	0	0.0%
⑤自由回答	1	11.1%
	9	100.0%



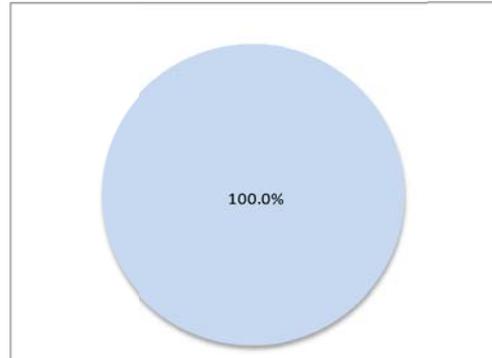
前問で①, ②を選択した方にお聞きします。
どのようなジャンルで関わってみたいですか？

①椿油商品のデザイン開発	1	12.5%
②椿油を配合した加工品開発	2	25.0%
③椿油の売り出し方や展開	0	0.0%
④間伐材を使った加工品開発	2	25.0%
⑤油粕を使った商品開発	1	12.5%
⑥その他	2	25.0%
	8	100.0%



前々問で①, ②を選択した方にお聞きします。
どの程度関わりたいと考えていますか？

①主の仕事として関わりたい	0	0.0%
②主の仕事に支障が出ない程度なら関わってみたい	5	100.0%
③アンケートや調査に協力する程度（趣味の範囲）であれば関わってみたい	0	0.0%
④副業として成り立つなら関わりたい	0	0.0%
⑤自由回答	0	0.0%
	5	100.0%



【参考資料】 椿農家の後継者問題等への意識調査（ヒアリング）

回答者		
男性	8	72.7%
女性	3	27.3%
	11	100.0%

年齢		
50代前半	0	0.0%
50代後半	2	18.2%
60代前半	3	27.3%
60代後半	1	9.1%
70代前半	1	9.1%
70代後半	3	27.3%
80代以上	1	9.1%
	11	63.6%

家族構成		
夫婦のみ	4	36.4%
1人暮らし	0	0.0%
その他	7	63.6%
	11	100.0%

ヒアリングでの意見	農家
【椿の仕事の継続性についてどのように考えているか？】	
子どもに継がせたいが、どうなるかは分からない。	A
子どもに継がせたいが、帰ってくるか分からない。	B
子どもは2人も嫁いでいるため、現実的に跡継ぎはいない。帰ってこいとは言えない。	C
あと4、5年は頑張れると思うが、それ以後はやる気のある人がいれば貸したい。	
希望としては子どもに継いでもらいたい、現実的には分からない。	D
子どもに継いでもらいたい、海の仕事をやっているからどうか。	E
子どもに継いでもらいたい、島に帰ってくるか分からない。	G
子どもに継いでもらいたい。→娘夫婦が帰って来てくれる	H
自分の子どもは島に帰ってきたが、椿山はやらないと思う。	I
誰かしら子どもには帰ってきてもらいたい・・・現実的には分からない。	J
子どもに継いでもらいたい→子ども夫婦はUターンで移住している	K
【管理している椿山の中で休耕地はありますか？】	
現状は管理しきれてない土地はないが、できなくなれば貸しても良い。譲渡は難しい。	A
人の椿山も一部管理しているくらい。しかし体力的に厳しくなれば返すことになる。	B
今はまだ人の山もやっている状態。体力的に厳しくなれば返す。	D
管理できていない椿山もあるが、それは捨てたと思っている山。	G
自分だけで今ある椿山を管理しきれない。民宿など他の仕事もある。	J
ほとんど管理できているが、上の山はやっていない。他の家も同じ	K
【今後、体力の低下などで管理できなくなった場合、どのように考えているか？】	
自分の代で椿山が捨て山になることは避けたい。Uターンでもやってくれる人がいれば。	A
今は夫婦でやれているが、先は分からない。手伝ってもらうことも必要になるかもしれない。	B
自分ができなくなれば、貸し出すことで誰かしらに椿山を維持したい。	
土地を貸したくないというのはない。管理してもらえらなら。	C
子どもが帰って来ない時は、誰かに管理してもらいたい。自分の代で捨て山にはしたくない。	D
若人がグループを作って、うっちゃり山(捨て山)を管理してもいいのでは。	E
1人でやるより仲間がいたほうが面白い。木を切るのも楽しいのではないか。	
将来的に体力が低下してくれば、誰かに貸し出すことも考える。	F
宮沢線より上の山は誰でも貸すのではないか。ただし、きちんと手を入れてくれるかどうか。	
椿山を管理してくれるのであれば手数料はいらぬ。自分の収入にすれば良い。	G
管理できない椿山が出てきたときには貸すことで管理してもらえたら。	H
自分の子どもが椿山をできなければ、貸すことも考えるようになると思う。	K
貸したい人がいれば貸してもいいが、以前貸してほったらかしにされた経験があるので。。。。	I

【参考資料】 椿農家の後継者問題等への意識調査（ヒアリング）

【貸し出しについて管理費などの手数料は必要か？】	
管理してもらえるのであれば手数料はいらない。	F
無償で貸し出して構わない	K
貸すことに関しての手数料はいらない。	H
椿山を管理してくれるのであれば手数料はいらない。自分の収入にすれば良い。	G
貸すことに関して、手数料等はいらない。管理してもらえるのだから。	D
貸し出すことについての手数料はいらない。	I
【椿山の貸し借りの方法について】	
仲介してくれる組織があれば貸し出しはしやすくなると思う。	B
役場や農協など、どこか仲介してもらえると良い。	C
どこかが仲介してくれるとトラブルになった防止にもなるのでは。	D
農業委員会が本来やるべきで、できていない状況がある。	F
貸し借りについて仲介がいれば、本人同士で話すより良いのではないか。	H
農地貸し出しの仲介はどこかしらの団体がすべき。	J
農地の貸し出しはどこかが仲介してもらうところがあると貸しやすい。	K
【椿産業の収入について】	
椿産業だけで十分に食べれるのであれば、平日勤めには行かなくて済むが・・・。	A
椿自体の収入は少ないので、日当を払ってまでは手伝ってもらうことはできない。	C
椿は収入が限られている。年金をもらっているからやれているようなもの。	D
収入も年1回のため、新規で就農となると厳しい。必ず主となる仕事が必要。	E
収入は勤め人に比べると微々たるものだが、肥やしも使わずできるもの。	
主の仕事を持っていて、片手間でやる分には良い。	F
作業も自分たちで全てはできないので、日当を払ってやっているので儲けがほとんどない。	K
【椿産業に対する想い】	
子どもが継がないにしても、自分の土地は椿の仕事ができるように残したい。	A
管理ができなくなり、捨て山にすることは避けたい。	B
跡継ぎがいると嬉しい、自分のやる気も変わってくる。できる限り、椿山を残したい。	H
うっちゃり山(捨て山)に一度なると管理は大変。しっかりやってくれる人がいればいいが。	I
夏場の草刈の作業は、豊作不作関係ない。とにかくうっちゃり山(捨て山)にしたらダメ。	K
歳を取ってからでもやれるもの。没頭してやれることがあることは良いこと。	C
自分の子どもが帰って来なくても、誰かしらに管理して行ってもらいたい。	D
うっちゃり山(捨て山)が増えると害虫が増えるため、草刈だけは続けないと	
椿山自体がダメになってしまう。それだけは避けたい。	E
上の方の山は、管理しきれていない農家が多いため、どこも貸してくれるとは思いますが、既に藪になっているから、きちんと手を入れられるかどうか。できれば生産量も増える。	F
【椿産業の歴史等について】	
昔は現金収入が限られていた。椿実を拾うのは年寄りでもできる仕事。	E
江戸時代後期から椿油を年貢として納めていたが、明治11年頃は絹生産も行われていた。	E
女性が木に登り、椿実を収穫していた。→マシラの如しと言われていた。	E
江戸時代後期に急坂の土地を段々畑にした(8合目より下)。	E
集落への水害防止や椿実の流出を防ぐため。特に集落の上を重点的に行った。	E
昭和40年代後半に椿油に関する国内外の産地調査を村で行った。	E
その結果、利島村での生産量が48.5%を占めることが分かり、重点施策として工場建設を計画。	E
和歌山県で梅の収穫に使う機械(掃除機のようなもの)を椿実に転用できないか試したがダメ。	E
機械化をしようとしても椿産業では限界がある。どうしても人の手が必要。	E
夏場の草刈が大変なため、除草剤を撒いたこともあるが、苔も生えなくなり保水力が下がった。	E
昔から里地山は椿実が良く取れる。→傾向が分かれば対策も考えられるかもしれない。	E
【体験農業について】	
体験農業のようなもので、多少収入ができるなら嬉しい。	D
ゲストハウスみたいなどころがあれば農業体験もできるのでは。	F
民泊は難しいかもしれないが、滞在型(ゲストハウスなど)で外から受け入れてもいいのでは。	G
夏にやっているボランティアのように体験で収入が得られるなら、やりたい人はいると思う。	K